

太平洋戦争開戦・世紀のスクープ

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

一九四一(昭和十六)年、日中戦争からすでに四年余。わが国は抜きさしならない戦争のドロ沼に一層深くはまっていった。ABCD 包囲網の経済封鎖が続き、日米交渉も好転は期待できなかった。

英米との開戦の空気も日増しに濃くなるなかで、報道への統制も二重三重に厳重になった。新聞への検閲、統制は「新聞紙等掲載禁止令」「新聞事業令」「言論出版集会結社取締法」「治安維持法」などのほかに、「軍機保護法」「戦時刑事特別法」や「国家総動員法」の第二十条、「新聞紙その他の出版物の掲載につき制限又は禁止」の一項でも取り締まられた。

一九四一年春からは御前会議、閣議やこれに準ずる会議の内容が機密漏洩しないように「国防保安法」が設けられた。政府の発表以外は一切書けないような、がんじからめの統制に追い込まれた。

さらに同じ年の八月六日には「英米の不当な対日圧迫は断乎排撃抗争する決意と気魄を充満させること」「大東亜共栄圏の確立が帝国の死活問題であることを強調する」などの「国論昂揚二関スル件」が閣議決定された。

同月には「新聞指導要綱」「臨戦映画体制への躍進 - 情報局の一大決意」や、十一月四日には「対英米問題に関する与論指導方針」などが次つぎに決められた。

言論統制から、すでに戦時の情報宣伝へと新聞の役割は転換していたのである。戦争遂行のための言論戦、宣伝戦の重要な一翼を新聞は担わされた。

“報道報国” が各社のスローガンに掲げられた。11月28日には「新聞ノ戦時体制

二関スル件」が閣議決定された。(1)

これは内外の情勢の重大化によって、新聞の運営を一層、国家目的に合致させようというものであった。

その内容は次のようなものであった。

新聞統制会ノ設立 - 全国の新聞を強制加盟させる法人とし、新聞の統合、合併、新設、資材の配給調整、言論報道に関する国策の遂行に協力するとともに、国家目的に副う経営、編集の改善を行う。なお、役員は政府の認可が必要。

新聞ノ経営主体 - 新聞社の設立は許可主義によることとし、その首脳者の選任には一定の適格条件を設ける。(他略)

政府ノ監督 - 政府は統制会及新聞社の指導監督を行うが、新聞に関する指導監督の一部は統制会に委譲実施する。

新聞記者クラブの整理 - 機密保持及報道宣伝の積極的指導のため、現在の乱立無統制なる記者クラブを整理する。各省における従来の記者クラブを廃止し、新たに新聞統制会(連盟)において記者会を結成する。政府の発表は原則として、連盟記者会を通じて行い、整理に際して必要ならば転業の道も検討する。

新聞記者の育成 - 新聞記者の品位向上と地位の保障を確保するため、新聞記者の養成訓練を新聞統制会の事業として実施する。新聞記者の採用は統制会をして審査登録させる。厚生施設の完備を期すため、政府は相当の補助を行う。

新聞の国家管理を統制会を使って行おうというネライだった。

具体的には新聞一元会社案というもので、全国の新聞社を一つの会社として吸収し、幹部は政府に任命権を握られるという、まさしく国家統制そのものだった。

『朝日』『毎日』『読売』という長い伝統を持った自由な新聞にとっては死刑宣告と同じであった。

朝日は緒方竹虎、毎日は山田潤二(専務)、読売は正力松太郎(社長)が一致協力して猛反対し、賛成派の報知新聞の三木武吉(社長)らと徹底してやり合った。

三人は「新聞の自由を守るため、生命にかけても反対する」と情報局からの圧力をは

ねかえし、一步も譲らなかつた。

結局、この強い反対によって政府は一元化をあきらめ、新聞事業に関する国策の立案、遂行に協力することを目的とする団体として、1942(昭和十七)年二月五日、日本新聞会(会長、田中都吉)が創立されたのであった。

こうした背景の中で『東京日日新聞』(現『毎日新聞』)は太平洋戦争の始まった一九四一年十二月八日の開戦日をズバリとスクープした。

ただ、戦後、この世紀のスクープは余り評価されず、『毎日』では「竹やり事件」の方が脚光を浴びた。竹やり事件は反戦のスクープではないにしても、政府へはっきりと批判の矢を放ったからである。

「開戦スクープ」が政府の動向に食い込み、ピタリと的中させた特ダネならば、竹やり事件は政府の無謀な竹やり訓練を批判し、国民から強い支持を得たスクープであった。時間差のスクープより、いつの時代でも権力の不正や虚偽をスッパ抜くスクープの方に高い評価が与えられる。

太平洋戦争の開戦は十二月八日である。『東京日日』はこの日の朝刊で戦争勃発を暗示する大々的な紙面を掲げた。

「東亜攪乱・英米の敵性極まる」「断乎駆逐の一途のみ」と大見出しで予告、午前七時のNHK臨時ニュースの「大本営陸海軍部発表、帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋上において米英軍と戦闘状態に入れり」でピタリと的中した。

国民も各新聞社もこの見事なスクープに驚いた。

このスクープをしたのは『東京日日』で海軍省の黒潮会(記者クラブ)に所属していた後藤基治記者であった。

情報源を秘匿するのは記者の義務である。後藤記者は戦後になっても、このスクープの内幕は明かさず、一九六九(昭和44年)十一月にはじめて米内海相が情報源だったと28年ぶりに真相を発表した。

一九四一(昭和十六)年十月十八日に東条内閣が成立した。主戦派の東条内閣の誕生で戦雲は急を告げたが、日米交渉は難航しながらも何とか和平への道を模索していた。



その陰で戦争準備も着々と進められていた。戦争か和平か。息詰まる日々が過ぎて行った。後藤記者は敏腕記者らしく、その進展ぶりを一瞬でも見落すまいとギリギリの取材を重ねていた。

十一月十三日午後。後藤は米内海相の自宅を訪ねた。米内海相は人望が厚く、記者からは「語尾をにごさない人」と定評があった。後藤が東条首班をスクープしたのも、米内海相に事実をぶつけて、語尾をにごさなかったおかげであった。

この日、後藤の鋭い質問に、米内海相はうなずきながらも、なかなか確証を与えなかった。そのうち、米内海相は側にあった黒カバンをテーブルの上に置き「ちょっと失敬する」と部屋を出ていった。

その瞬間、「カバンの中身を見よ」という暗示だと後藤は思った。後藤はカバンをそっと開けて、中の書類を見た。薄い書類には『米英、蘭、泰』などの国名を列挙し、武力発動は「十二月初頭」と書かれていた。胸の動悸をおさえながら、後藤は素早く書類をもとにもどした。

すぐ戻ってきた米内海相はカバンをとり、「この中に君たち記者の見たがっているものが入っているのだが、うっかり見せればコレだよ」(2)と首を切ってみせた。

もし、この事実がバレたならば国防保安法によって機密漏えいで大臣といえども厳しく処分された時代である。

「開戦日は十二月初頭」、「デーは何日なのか」後藤記者は世紀のスクープに胸をおどらせた。しかし、この大特ダネをどう社の上司に知らせるか、後藤は迷った。

情報源は社の幹部とはいえども絶対に口外できない。それに後藤自身がまだ『大阪毎日』の社会部から『東京日日』の政治部にきたばかりの新米だった。この世紀のスクープを信用してくれるかどうか。

後藤の親しい友人に久徳通夫陸軍中佐がいた。ある日、久徳中佐から後藤に至急会いたいと電話がかかってきた。

会うと、久徳は「いよいよはじまるぞ」と後藤に耳打した。

久徳はそれまでバンコクに潜入し、商社員になりすまし、「気象観測原簿」を入手しようと奔走していたのだ。

苦心をして手に入れた原簿から分析した気象情報を後藤に無造作に見せた。

久徳中佐はこう続けた。

「この資料を参謀本部は気象学の西村伝三博士にみせて十二月上旬の前半がよいが、それとも後半かと質問した」(3)。聞いていた後藤はかたずを呑んだ。

「そしたら、統計上、十二月八日と出た」

それ以降は風波が激しくなって、上陸作戦はとて不可能になるという。

十二月初頭から十二月八日と “ デー ” はいよいよ鮮明になってきた。ドイツの電撃戦からみて、日曜日早朝の可能性が一番高い。しかし、本当に戦争ははじまるのだろうか。

国家の運命をかけた大戦争だけに、後藤は半信半疑だった。執ような取材を続けた。

十二月一日。宮中東一の間で御前会議が開かれた。

この会議には珍しく全閣僚が出席した。東条首相は「……一度開戦ト御決意相成リマスレバ、私共一同ハ今後一層報国ノ誠ニ致シ …… ¥」と述べ、開戦が決定された。しかし、御前会議の開催は国家機密で後藤記者らは知る由もなかった。

この日『東京日日』上海支局長の田知花信量が飛行機で上海から広東に飛ぶ途中、行方不明になる事件が起きた。

この飛行機には支那派遣軍参謀が開戦に関する機密書類を持って同乗しており、大本営は緊張した。

同二日、アメリカ航路の龍田丸が37人のわが国の外交官や家族を乗せて、日本へ向かった。

この船が帰国後に開戦する - とまことしやかな噂が広がった。

四日海軍省報道部から各社へ申し入れがあった。『五、六、七日の三日間、水兵を一日三千人が東京見物するので、各新聞社を見学させてほしい』という。例のない大規模な水兵上陸だが、開戦をカムフラージュする陽動作戦だと、後藤にはピンときた。

七日は日曜日だったが、後藤は海軍省へ顔を出した。

黒潮会の記者クラブはガランとし、人気もなかった。裏の自動車部へ回ってみた。海軍大臣付の運転手に声をかけた。運転手たちとは日頃から親しくしていた。

「今日はヒマそうだね」

「イヤ、早朝から、大臣と軍令部総長がこの車で明治神宮と東郷神社にお参りしましたよ」(4)

運転手の言葉に後藤はギクツとした。

「明治神宮では大きなお札を受けて来られました」。

後藤記者は念押しのため海軍省報道部に平出課長を訪ねた。

するとそれまで出入り自由の報道部の扉に「許可なくして入室を禁ず」のはり紙がある。

「日ごろ、黒潮会と報道部は一心同体、などおだてているくせにけしからん」とドアを開け「平出さん、あのはり紙は何ですか」「あんなものはったら、いよいよ戦争をはじめると広告しているようなもんですな」というと、平出大佐はギクリと腰を浮かして、すぐはり紙をはがしてもどった」(5)

その姿に後藤記者はますます確信を深めた。

すべてが十二月八日開戦の情報にビタリと収斂した。

「いよいよ、海軍もやる。8日に間違いない」 - 後藤は全身に電気を浴びたような緊張で震えた。いそいで社にかけ込んだ。

社に集まってきた陸軍省をはじめ各省からの情報も開戦迫ると指していた。阿部賢一主筆(後、早大総長)のまわりに渡瀬亮輔政治部長、高杉孝二郎整理部長、陸海軍担当記者らが集まり打合せた。

開戦を紙面で国民に率直に知らせよう。そのために、永戸政治論説委員がその意を含んだ社説を書くことになった。

しかし、厳重な検閲の中で、果たして紙面がすんなり通るかどうか疑問だった。朝刊の何刷から入れるか、早版は各社交換するので避けることに決めた。交換以降の版にしたが、ゲラを見た検閲担当者は開戦を暗示した派手な見出しに目をむき、激怒して、こんな激しい紙面を作ると軍法会議にかけると脅した。

せっかくの歴史的なスクープが差し押さえられると元も子もなくなる。何とかしなければならぬ。その夜の政治部デスクの井上縫三郎は早速情報局に電話を入れた。

情報局次長の奥村書和男宅に電話したのだ。「留守」だという。奥村夫人に行き先を聞いて、電話を入れると、都合よく奥村が電話口に出た。

再び「日米交渉は完全にゆき詰まり、決裂のほかなくなっていることがわかった。それを明日の朝刊にのせるが、押さえないでほしい」

奥村はしばらく考え込んで「そうか。しかし、事実がそうだという記事は困る。そこで相談だが、君の社の判断として、決裂以外に道はないという表現でやれないか。それなら新聞を差し押さえないようにしよう」と条件を出した。(5)

「仕方がない。そのようにやりますから、頼みますよ」と念を押して、井上は電話を切った。紙面になった原稿は陸軍担当の栗原広美記者が数日前に予定稿として出していたものであった。

栗原はこの原稿をさらに主観的な表現に書き改めて、トップ原稿に仕立てた。栗原らは原稿を出すと、間違いはないかどうかをもう壺確認するためにあちこちに飛んだ。締め切りにはしばらく間があった。

阿部主筆自身も車を走らせて、大森に住む徳富蘇峰宅を訪ねた。蘇峰は『東京日日』の社賓であり、阿部はその女婿でもあった。

来訪の主旨を告げた。蘇峰は「そうだろう。もうすべての準備はでき上がり、宣戦の詔勅も準備ができ上がっている」(6)と静かな口調で語った。

この言葉に阿部は安心して、思い切った紙面を展開するように皆に指示した。

『東京日日』の世界の新聞史上にも残る歴史的なスクープは、こうして輪転機でインクのニオイも鮮明に刷り上がっていった。

その日の紙面を眺めてみよう。

第一面では横見出しに「東亜攪乱、英米の敵性極まる」と大きく謳い、縦には「断乎驅逐の一途のみ」「隱忍度あり一億憤激將に頂点」「黨進一路・聖業完遂へ」と大トップで報じている。

左肩の社説は「米国の野望を撃退せよ」とあり、その下には「比島陸軍に重大宣言」「香港で総動員令発令」「タイ、遷都も準備完了」と各地で開戦準備が完了したことも予告した。

一方、社会面でも「断じて起つ・一億の時宗」「銃後は火の玉、見よこの備へ」「元遠かくや荒ぶ神風」で国民の決意を呼びかけた。

太平洋戦争の開戦をどの紙面も伝えていた。後藤記者らの半年間の血のにじむような努力が実ったのである。紙面からは熱気と迫力が読者にじかに伝わってくる。

第一面の記事の内容はこうだ。

「日米交渉の進行如何に拘わらず、帝国不動の大国策たる支那事変の完遂と大東亜共栄圏確立の聖業が、もはや英米の反日敵性的策動を東亜の天地から一掃せざる限り、到底達成し得ぬ重大段階に進んだことは明白な現実の姿であり、またわれ等一億同胞の国民的感情である。……世界平和を希求する帝国といえども、隱忍自重には自ら明瞭な限界がある、敵性諸国家の対日圧迫、攻勢が皇国の權威と存立を脅威するにおいては、わが平和愛好の利劍は一閃して破邪顯正の宝刀と化すであろう。

(中略) 敵は既に一重慶に非ず、いわんや一蒋介石でもない、かれを走狗となし、かれをしそうする英米の現状維持的世界支配国家である。支那事変は今や世界史的規模において雄大無比の構想に基き、その解決に直進せねばならぬ重要段階に到達したのである。東亜諸民族の運命を双肩に拳国総進軍の秋を迎えたのである」

社会面の記事はこういう調子だ。

「肇国以来外敵の侵入を許さなかったわが国も今や、空爆の危機を覚悟しなければならぬ事態に到達した。

太平洋の彼岸を見よ、ルーズヴェルト大統領は自己の栄達と世界制覇の野望を達せんがために、日本宿敵に名をかり、ABCD 包圍陣の強化をはかり、軍備の数学的優秀を誇示して、東亜の盟主日本を輕視し、威嚇屈服させようとしている。

中国、タイ、仏印、マレー、蘭印、ビルマ、インド、フィリピン等の東亜の有色人を奴隸

化して、飽くなく搾取の犠牲として私腹を肥やそうとしている。今こそ一億国民の起つべき秋は来た。

私に“時宗”の決意あり、我に“正宗”の銘刀がある『イカばかり食わされる』とか『肉がない』とか、そんな議論をしている場ではない。

梅干と茶漬で十年でも二十年でも頑張る時は来たのだ、国民は明日にも空爆を受ける覚悟が必要だ、防空訓練を活かすのもこの時だ。日本精神を受け継いだ隣組組織を試練する時も来たのだ。

もしも、あざ笑うルーズヴェルトの鼻をあかすことが出来なかったら、これまでの一億一心も口先きばかりのことになる。弘安年間、元冠を退けた“時宗”に国民一人々々がなって銃後も前線もガッチリ牡を極める時期は正に来たのだ

「欲しがりません勝つまでは……」が戦時スローガンとしてその後声高に叫ばれる。この記事では「梅干と茶漬で十年でも二十年でも頑張る時は来たのだ」「国民は明日にも空爆を受ける覚悟が必要だ」とその後の状況を予言する内容になっている。

ここには、日米戦争を元冠にたとえる狂熱的な精神主義、神風を期待するアナクロニズムがはっきりと読みとれる。その点では時代を超えたスクープではなく、あくまで時流にピッタリくっついた特ダネだったのである。

(つづく)

< 引用資料・参考文献 >

- (1) 『現代史資料(41) マス・メディア統制 2』 内川芳美編・みすず書房 一九七五年十月 三
366 - 367P
- (2) 『戦時報道に生きて』 後藤基治 非売品 一九七四年十一月 34P
- (3) 『同上』 40P
- (4) 『同上』 49P
- (5) 『海軍報道戦記』 後藤基治著 新人物往来社 昭和50年5月刊 46 - 47P
- (6) 『毎日新聞社社報』 一九六五年十二月十日号
- (7) 『新聞と大学の間 学究・記者・早大紛争』 阿部賢一著 毎日新聞社 一九七五年刊
137P